

特集

# 暮らしを支える “自分のお店”が消えてゆく 世界中に蔓延するショッピングモール



ウォルマート北京

底が抜けた「安売り競争」  
ユニクロの990円ジーンズからはじまって、イオン・ダイエーが880円、西友が850円と、大手小売りの安値ジーンズ競争が止まらない。エコノミスト浜矩子さんは、「ユニクロ栄えて国滅

## ショッピングモールが むらとまち、 農と食を壊している。 ― 地域内循環でむらの再生を

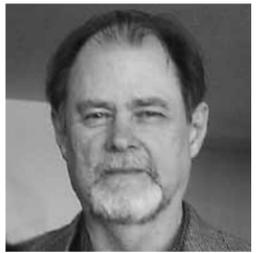
西沢江美子 / にしざわ・えみこ  
ジャーナリスト

「ぶ」と『文藝春秋』10月号でこのデフレの危険を指摘し、大きな反響を呼んだ。それでも消費者にとつてはいことだと思っ

グローバル化の影響は農業や食、労働現場にとどまらない。足元のま

## 暗闇で感じたこと

ロバート・リケット / Robert Ricketts  
和光大学教員



「わかりますか」「ありがとう」お互いの行動は声で確認していき

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」は1989年にドイツで生まれ、その10年後から日本でも開催され

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。

### CONTENTS ■ HALINA 07 2010.02.01

- 02 Relay Essay ポコポコ⑦ 暗闇で感じたこと◎ロバート・リケット
- 03 [特集] 暮らしを支える“自分のお店”が消えてゆく ― 世界中に蔓延するショッピングモール ショッピングモールがむらとまち、農と食を壊している。― 地域内循環でむらの再生を◎西沢江美子
- 08 [Topics] 農業はおもしろい! と実感する農場へ―次世代農民を応援する農民学校が始まります。◎大橋成子
- 10 [Column] しらかが便利① 農作業・加工作業も自前の腕で◎足田美津子
- 12 撮っておきアジア⑦ フィリピン、イフガオ州◎星加浩二
- 13 APLA生活⑦ マスコバド糖かりんどう―マスコバド糖との出会い、そしてかりん糖。◎守下武彦
- 14 [Voice from APLA partners] 『韓国ソウルより』『互恵のためのアジア民衆基金』設立総会に参加しました。
- 15 事務局便り

### 表紙のことば

今回の表紙は東ティモールの“タイス”です。タイスには色とりどり、様々なデザインや大きさがありますが、私が初めて東ティモールを訪れたときにいただいたのは、東ティモールの国旗をモチーフにしたタイスでした。

どころにきてしまった。

例えば、スーパーのプライベートブランド(PB)商品展開の激化にそれはあらわれている。PB商品とは、大手スーパーとメーカーが組んで独自に開発した商品のこと、割安で品質もいい。メーカーのブランド名をPB商品につけると、メーカーが販売するブランド商品が売れなくなる。そこでスーパーはこれまで、メーカーのブランド品と並べてそのスーパー独自のブランド名をつけて売っていた。これがPB商品で、安売りの先頭を走ってきた。しかし、最近の安売り競争の激化のなかで、割高なメーカーのブランド商品は売れなくなってしまった。そこで、安いPB商品にブランド名を付けて安売りに参入するという事態が起こった。高品質で売ってきたメーカーのブランド商品がスーパーの安売り商品に飲み込まれてしまったのである。この事実、安売りが競争が生産のおおもとまで食いつぶしてしまっていることを物語っている。

### しわ寄せは農民と労働者に

農産物も、いま安売り競争の巨

地域の店をつぶし、地元雇用と金も落とさない。にもかかわらず、自治体が域外から来た大型店のために、敷地や道路整備に公的支援をすることが圧倒的に多い。自治体こそ、そこに生きている人たちの生活を持続的に発展させること

大な怪物に飲み込まれている。例

えば、大手スーパーが、キャベツ1個10円の山を作ろうとすれば、早朝にキャベツ畑に着くよう深夜トラックをどこまでも走らせ、スーパーの開店と同時にキャベツの山を作らせる。寝ないで走る運転手、寝不足で収穫する農民。契約のキャベツの量が足りなければ、生産者が自分で金を払っても近所からキャベツを集めざるを得ないという。

ここで見てくるのは、軽いサイフで必死に安いものを探す消費者、生きのびるために生産者が死んでしまうかもしれないことを知りながら、買い叩き、安いものを売る企業だ。そこでは、誰も潤っていない。もちろん、その間で働くものたちは苛酷な労働環境で働いている。どこかが狂ってしまった。これまでの経済学の常識なら、これは寡占市場でモノの値段が下がらないはずだ。しかし現状は違う。登りつめた大手スーパーは、お互いに潰しあいながら値下げ競争をやめられない。それが、市場原理主義を尊敬し、規制緩和を進め、日本にグローバル・スタンダード主義を強行した小泉改革が作

り出した激しい競争社会である。

### ショッピングモールがつくる死の街

まさに目を向ければ、2000年に大店法が廃止。いっきに地方にアウトレット、ショッピングモールと呼ばれる巨大な複合商業施設が乱立している。歴史をつくってきた在来の商店街は、シャッター街に、そして死の通りへと、静かに転げ落ちていく。それどころか、つい一年前まで、商店街から客を奪っていたファミリーレストランなど大手チェーン店も、閉店に追い込まれた。そして、地域の住民は、「買い物難民」から「外食難民」、「コミュニティ難民」と、その地で生きていく人間の生存に関わるまで脅かされている。こうした状況は地域全体に影響を及ぼし、各地に死の地域を作り出している。

こういったショッピングモールは、広大な土地に衣料雑貨、食品から映画館やゲームセンターまで、様々な店が集まってできた、いわゆるお店のテーマパーク。業界の市場規模は4550億円。2008年度は5200億円(推計)。その成り立ちは、不況で空き地

の州法でローカル・コンテンツ法では、進出企業に対して地域内の原材料を使うよう義務付けている。グローバル経済で壊されてしまった生産・生活・自然の再生産が一体となった経済行動を、再構築していかねばならない。域外



郊外に大型ショッピングセンターができて閉店間際に追い込まれた市街地の地元小スーパー。すでに棚は空っぽ。(埼玉県秩父市で)

になった公的所有地を大手不動産が借りたり食ったり、店舗化するといった共通点がある。出店の元気がいいのは、三菱地所系と三井不動産系の2社のみ。どんな寡占化が進んでいる。出店する店舗の本社のほとんどが、東京か外国資本。1年目はいいが、その後は出入りが激しく閉店に追い込まれ、巨大なお化け屋敷も現れている。店は土地を所有しないから、いつでも出て行ける。雇用や売素材は地元のものではない。地元へ落ちる税金も小額であり、モノも金も地域内で循環することはない。

### 人とむらが続く地域を

地域の人たちは口をそろえて、「買うものがない。若者向け」「交通不便なところで、車がなければ行けない」と言う。住民に不評で、

資本の流入・退出、土地所有者の退出・解雇などについての規制を早急に設けるべきではないだろうか。

〔注〕大規模小売店舗における小売業の事業活動の調整に関する法律「消費者の利益保護に配慮しつつ、大規模店舗の出店に伴う周辺小売業への影響を考慮し、一定の規模の出店等を規制する法律のこと」

### レポート Report

## フィリピン、ネグロス

Negros, Philippines

いったいどこに危機があるのだろうか？

と頭をかしげてしまうほど、バコロド市の中心街は曜日や時間に関係なく、買い物客や雑多な商売を繰り広げる老若男女で溢れている。この人びとの波は近代的モールから昔ながらの商店街まで満遍なく続く。いつもこんな人が多いのは、会社の就業時間に縛られる正規雇用者が圧倒的に少ないことが大きな理由だろうが、ネグロス版ワーキングプアも負けてはいない。わずかな資金で仕事を創りだしている売人・値切る交渉を楽しむながら安価な品物を探す買い物客など、ダウンタウンは生

## 活気あふれるダウンタウン

### モールと商店街が共存する理由は？

大橋成子／おおはし・せいこ  
APLAフィリピン担当デスク

活と情報交換と娯楽が混ざり合った活気あふれる場になっている。

### ダウンタウンとショッピングモール

ネグロス西州の州都バコロド市の人口は43万人。砂糖貿易の基地として作られたこのまちは、マニラやセブ市のような複雑な交通網とは違って、碁盤の目のように大通りが分かれ、ラクソン通り・アラネタ通りとそれぞれに大地主のファミリーネームが付けられている。まちの中心部である大聖堂とプラザ(市民広場)から放射線状にダウンタウンと呼ばれる昔ながらの商店街が続く。雑貨屋・電気屋・金物屋・食堂・洋服専門店に交じって地元資本のデパートも盛況だ。人が行きかうだけでも狭い歩道には、インドネシア産のバティ



賑わうダウンタウン界隈。

ックや海賊版のDVDを売るムスリムの行人、切れなくなつた包丁などを瞬時で砥いでくれる出店、怪しげな「宝石」売り、ケータイ電話の修理屋などがひしめきあっている。

バコロド市にはこの10年間ですでに4つの大型ショッピングモールが建設された。しかし「モールができる」と商店街がつぶれる」という日本型の消費構造とはかなり違う。巨大モー

ルは客の階層を睨んで実に上手に立地されている。高級イメージで最初に作られた『ロビンソン』は中流・上流向けの住宅街に近い。3年前に庶民の大好きなダウンタウンから歩いて行ける距離に建設されたSMは、車社会に馴染まない人びとにとっては、ジープやバスを乗り変えずに安い商店街と涼しくおしゃべりなモールを歩いて行き来できる一大娯楽地になった。モーターが人を集めるのは店構えだけではない。コンサート、マニラからの映画スターのサイン会、子どものダンス大会など無料イベントが毎週繰り広げられている。

### 商店街とモールの共存

「モールが進出して商売に影

響はありますか？」という質問を商店街で聞くと、意外な答えが返ってきた。金物屋や電気屋の店主は「影響はないね。うちには昔からの得意がいる。モールは買うだけだが、うちじゃアフターサービスまでするからね」。食堂のおばさんは「皆かしくく買物しているよ。品物と値段をちゃんと比べて買っている。モールでピザパイは毎日食べれないよ。やっぱりうちの焼き鳥や魚のスープがおいしいといってくれる」。魚屋と八百屋には「新鮮さがちがうじゃないか！」と怒鳴られてしまった。バコロド市のような地方都市にまでモール現象が訪れたのは、やはりグローバル化と密接な影響がある。中国、タイ、マレーシア製品など安価な電気機器から家具・雑貨まで様々な商品がどっと市場に溢れるようになった。これは個人商店ではできない芸当だ。それなのに旧来の商店も元気なのは、階級がはっきり分かれるネグロス社会ならではのこともかもしれない。懐具合にあわせて、商店街とモールを使い分ける術が身につけている。

レポート Report

インドネシア、スラバヤ

Surabaya, Indonesia

スラバヤは人口300万人を超えるインドネシア第2の都市。オランダ時代から貿易の中心として栄え、華僑やアラブ系の商人が行きかう伝統的な市場で繊維製品、食料品などを扱う小売や卸の店がひしめきあっていた。そんなスラバヤも、昨今ここを訪れる人の目には、巨大なショッピングモールがあちこちに建ち並び急速に発展を遂げる近代都市に映るだろう。

気庶民にも人気の大型ショッピング・モール

元タイインドネシアではショッピングの中心は青空市場、日中はじりじり照りつける太陽のもと、雨期はスコールに晒される、そんな中で人びとがひしめき合いつながりながら売って買っていたのだ。それが屋内ショッピング・セン



大学も併設したモール出現！

大型モールの台頭と消え行く露天商市場

津留歴子 / つる・あきこ  
APLAインドネシア、東ティモール担当デスク

ター、つまりモールの出現で、人びとはクーラーのきいた涼しい中、スリや置き引きの心配をすることもなく買物を楽しめるようになった。スラバヤ第1号のショッピングモールは、トゥンジャガン・プラザで1970年代に建設された。今もってスラバヤでは大変人気のあるモールで休日は大勢の買物客で賑わう。経済成長に伴いモールの数も年々増え、スラバヤでは大規模モールだけでも、現在20を超える。これだけのモールが競合する中で、ティスカウントを売りにするモールが増え、庶民にとっても買い物しやすい場所となってきた。また、これはインドネシアらしい客寄せ戦略だが、モールの中にイスラム祈禱所や教

会を設置しているところもある。2009年にオープンしたばかりのモールには、ホテルやアパートの他、大学まで隣接されている。大学に行くにはモールの入り口を通過するというわけだ。  
行き場を失う露天商  
モールが増加する一方で、政府は市場の小売店や卸を新しく建設するモールに統合していく「再開発計画」を推進し、伝統的市場は年々姿を消している。スラバヤではパサール・アトムという有名な市場があったが、ここを撤去して跡地にアトム・モールを建設した。こうした再開発では、市場の大多数を占める露天商はモールでの店舗料を払えず行き場を失う。市場を撤去する当局に体を張って抵抗する商人の姿はお馴染みの光景となった。2007年にスラバヤ最大の市場、パサール・トゥリが火事で全焼した。焼け跡には

パサール・グロシール・スラバヤが建設された。行政の再開発計画と古い市場の火事が偶然に

レポート Report

中国

China

休日の屋下がりのショッピングモールには行きたくない、いつもそう思っていた。無数の人、そして大量の品物で溢れかえっている。スーパーではカートを押して目指す棚に行くのもひと苦労、やっと品物を取ってレジに向かえばそこは長蛇の列。会計を済ませるのに20分以上待つことはざらだ。なるほどGDP8%近い成長に後押しされた「世界の市場」、中所得層の増大を実感する。

外資系大型スーパーの進出

90年代から日本のヤオハンをはじめ、カルフル(仏)、ウォルマート(米)、テスコ(英)、メトロ(独)、イオン(日)など外資系大型スーパーの中国進出が始まった。2002年の中国WTO加盟以後、フランチャイ



レジに並ぶ買い物客たち。

して2万円(30万円)を支払わなければならない。楊さんは高い手数料に見合う安定した生産量が望めないのだから、大

品できればブランドとして商品価値が上がる。そうでなければ農産物の価格は低いままのままで再度チャレンジしたいという。

リーマンショック以後、中国政府は4兆円(53兆円)規模の内需拡大政策の追加対策として農村の都市化を掲げた。具体策の一つとして各農村へスーパーを建設するための補助金を交付するという。すでに中国国内資本のチェーンストアが農村中心部に進出している。町に並ぶ小売店もすべてフランチャイズのチェーン店だ。しかし農村の消費が拡大するといっても政府の公共投資によって潤った中心部の農民だけであって、山奥の農民は出稼ぎに行かなければ現金収入がないには変わらない。私が暮らしていた雲南省の少数民族の農村、麗江の青空市場も撤去、改修され、近郊の農家はテナント料が高いため出荷できず伝統的な市場の規模は縮小、生産者と消費者は分断されている。

高橋敬子 / たかはし・けいこ  
2004年～2008年まで日本語教師をしながら雲南省、広州に住み農村調査をおこなう。現在中国での取材を映像作品に制作中。

格差を生み出す近代化の波

ズのチェーン展開に関連する規制が緩和され、巨大な物流、配送システムを梃子に北京、上海、広州などの大都会だけでなく地方都市へ出店ラッシュが続く。外資大手13社で700店以上を展開する。彼らは商品サプライヤーから受け取る手数料を効果的に使って低価格で大量の品ぞろえを提供する。

以前の人の生活はそれぞれ居住区にある農貿市場(生鮮食品や日用雑貨を売る市場)や周辺にある小売店で生活用品を購入していた。しかし、急速な都市化による再開発、不動産開発と共に高層マンションと大型スーパーやショッピングモールの建設が一体となつてすすめられ、とうの昔に地域の共同体や商店街などは壊滅している。開発のための住民強制立ち退きと地方政府の攻防は大きな社会問題だ。昔ながらの農貿市場は減少し、路地裏に住み続ける庶民や低賃金労働に従事する出稼ぎ労働者の多い地域に多少残るが、禁止農薬が使用されている野菜、ホルモンや抗生物質漬けの魚肉、中身が偽ものの化学調味料などが紛れ込み質の低下がすすむ。生活用品は値上がりし、格差が広がる貧困層にとってはますます生活が苦しくなる。

大量生産、大量消費、都市の拡大の津波が中国内陸部の奥へ奥へと押し寄せている。波が去った後どうなるのか。伝統と多様性、共同体の破壊、そして残されるのは荒廃した大地と人間の欲望だけではないだろうか。

「農民学校」は教室形式ではなく、毎日の実践から始めた。養豚や野菜作りの知識が必要ならば、地域の仲間にも声をかけ、篤農家を訪ね、現場で研修してもらおう。

昨年11月には近隣の町の小学校が計画して、4年生と6年生の「農場見学」が行われた。50人の生徒たちは研修生が育てた野菜の苗をお土産にもらって、野菜の作り方を熱心に聴いてい

カネシゲ・ファーム  
1989年に始まった民衆交易、その後産地で発生したバナナ病害の対策に尽力した当時のグリーンコープ専務理事、故兼重正次氏（1995年に癌で逝去を偲んで名づけられた農場。1996年に設立以後、現地のオルター・トレード社A.T.C.がバナナ実験栽培を中心に管理してきたが、2009年7月、農民が主体となって運営する農場と学校を作る場としてAPLAが20年間の契約でA.T.C.から借り入れた。



白柳誠一 枢機卿

【追悼】  
**白柳枢機卿を偲んで**  
前島宗甫／まえじま・むねとし  
APLA名誉顧問

白柳誠一枢機卿が日本ネグロス・キャンペーン委員会J.C.N.C.共同代表に就任されたのが2001年。その翌年、ネグロスを訪問された。とりわけエスペランサ訪問は画期的な出来事となった。

エスペランサはネグロス島のほぼ中心に位置し、大地主による「負の遺産」を色濃く残す場所であった。住民は地主と地主の傭兵によるさまざまな迫害を受け続け、多大の犠牲を強いられてきた。銃弾に倒された若きジョニー・ガイランの記念碑が今も耕作地に残されている。

枢機卿という存在はエスペランサの人びとにとって「雲の上」の存在である。それまで会ったこともなかったであろう。「あり得ない」枢機卿の訪問とミサ、そしてマニラで行われたフィリピン政府農地改革省長官との会談は、エスペランサの人びとにとれほどの希望をもたらしたことが。

フォルティッチ司教、ベン神父、相馬司教、白柳枢機卿と日本とネグロスの民衆連帯を支えてきた宗教界のリーダーたちが相次いで世を去った。寂しいことではあるが、自らの行動の中で示された白柳枢機卿の祈りが受け継がれていくことを願う。

**農業はおもしろい！と実感する農場へ**  
次世代農民を応援する農民学校が始まります。〈カネシゲ・ファームからの報告〉

大橋成子／おおはし・せいこ  
APLAフリーレン担当デスク

2 010年1月3日。カンラオン火山から清々しい風が吹くカネシゲ・ファームに50名の農民たちが集まった。ネグロス・キャンペーン時代から20年近く繋がりのあるバナナ生産者、砂糖労働者から農民への道を選択したエスペランサやサンフリアンなど各地の農民たち。

新年のお祝いは、農場でとれたナス・青梗菜・きゅうり・レタス・カボチャ・苦瓜などネグロスの行事では「ありえない」野菜料理だけの食事。飲み物はココナッツジュースにやし酒と、すべて農場からの自給でまかなった。この集まりは、これからネグロスで展開される新しい農業・次世代の農民育成を応援する実践農場と農民学校を、農民たちが協力して運営していこうと決意した新年会だった。

**新しい農民の取り組みが生まれるまで**

2008年、J.C.N.C.がAPLAに「ことだ」とエスペランサのマックは抱負を語った。

カンラオン山の麓の村バイスで農業をするジョネルの両親はすでに野菜用の畑と小さな豚舎を準備して息子の帰りを待っている。ジョネルは5人のうちで野菜の稼ぎが一番多い。彼に触発されて、他の4人も俄然はりきりだした。

幸い、今は野菜の売り先には困らない。農場周辺の学校の先生たちがケータイで注文してくる。堆肥だけで丁寧に作る野菜の味が評判になりだした。「カネシゲのきゅうりやトマトはすごく甘くて何日たっても腐らない」と近所の主婦もやってくる。月平均売上げが3万円近くになり、そこから牛や野菜の種を買い足している。

**希望ある農業をしていくために**

「農民学校」は教室形式ではなく、毎日の実践から始めた。養豚や野菜作りの知識が必要ならば、地域の仲間にも声をかけ、篤農家を訪ね、現場で研修してもらおう。

た。この子たちの親が野菜を買いに来てくれるという相乗効果も生まれていく。農場では現在セミナーハウスを建設中。農民が集える施設ができれば、女性たちのワークショップや食品加工、農業をもっと楽しく勉強するカリキュラムも増えていくだろう。さらに豚舎からバイオガスを引き、B.M.活性水を再生産することが計画され、2010年後半以降には良質の堆肥生産とその販売、そして活性水によって元気な豚や野菜が生産できることを農民たちは期待している。

これから20年という時間をかけて、この農場から生まれる若い農民たちがいくつもの「種」となって、ネグロス各地の農村に希望のある農業を定植してくれることを、2010年初頭にみんなで願った。■



野菜の出荷を準備する研修生たち。



農場を見学に来た小学生。

移行した契機は、ネグロスに農業で自活していく道を選択した農民ネットワークが生まれたことだった。個人農家で限界があることをどう支えあっているか。農地を守り、生産を高めていくには？ 農民たちの相談会は1年続き、そこから2つの課題が絞り込まれた。①各地で孤立することなくお互いが集い、農業を学びあうための場が欲しい。②後継者を育てたい。畑仕事で真っ黒になる親を尻目に都会をめざす青年たちは後をたたない。しかし結局

都会に疲れ、結婚して子どもができて故郷に戻るケースも多い。従来のネグロス社会の農民のイメージは「貧困・無学」。それに対して「楽しい・儲かる」農業のモデルと若い農民を創りだしていききたい。この2つの願いをかなえる場としてカネシゲ・ファームを借り入れ、そこで次世代農民となる青年たちを対象にした実践農業と農民たちが学びあう学校を創ろうという構想が生まれた。

**生まれ変わる農場**

平地や高台など起伏に富む5haのカネシゲ・ファームは、ネグロス中部ラカルロタ市にあり、APLAのパートナーである農民たちの地域から集まりやすい便利な場所にある。2009年7月、農場の修復作業が開

始された。同時に各地から16歳〜22歳までの5名の第一期研修生が集まり、放置されていた豚舎の修繕、腰の高さまで生い茂った草取り、数年間、鋤を入れていなかった硬い土壌の開墾が始まった。

「実践農場」に給料はない。研修生も教える農民も自分の作物は自分で売り、自分で稼ぐ。売り上げは将来地域に帰る際の農業資金として貯蓄する。農場運営に必要な経費は養豚と堆肥生産から捻出する。研修生は家畜の繁殖から野菜生産・堆肥づくり・マーケティングの開拓など一通りをすべて経験してから(約1年間)次の後輩グループに農場を引き継ぎ、貯めた資金と自分たちが繁殖させた子豚・堆肥生産方法をもって地域へ帰る。

「僕の夢は村で仲間を増やして、堆肥センター・養豚・養殖魚と野菜や米を作るミニ・カネシゲファームを作る

このコーナーは「KAJA」のメンバーの方たちに交代で書いていただきます。

03

# まだまだ 韓流

01

李泳采 / い・よんちえ  
恵泉女学園大学教員



韓国青年とベトナム女性のラブストーリー『ハノイの花嫁』の場面。

「ベトナム娘との結婚を斡旋します」——最近、韓国の地方の国道沿いでよく目にする広告の文句。「ベトナム帰りの金一等兵」という歌もあるように、ベトナム戦争を連想させる韓-ベトナム関係は、いつの間にかベトナム人の妻、ベトナム麺、韓流熱風などにすっかりイメージを変えた。その時代の変化がよくわかる作品としてベトナム終戦30周年記念で制作された『ハノイの花嫁』(05年、SBS)がある。医療ボランティアとしてベトナムに渡った韓国青年医師と、同時通訳のベトナム女子大生の切ないラブストーリーを土台にしているが、主なテーマは「新ライタイハン」の問題。

## 「新ライタイハン」と国際結婚を描いた『ハノイの花嫁』

韓国では90年代後半の金大中政権の時代、「ミアネヨ(ごめんさじ)、ベトナム」が流行した。ベトナムは、ベトナム戦争で被害者認識が芽生え始めた。当時、韓国のベトナム参戦後に生まれた子どもたち「ライタイハン」の訪韓とお父さん探しが話題になっていた。ところが、92年の国交回復以降、ビジネスでベトナムを訪れた韓国人男性とベトナム人女性の間に生まれた子どもが「新ライタイハン」で、今は彼らのお父さん探しが問題となっている。韓国人の東南アジア進出は戦争、ビジネス、そして売春観光の一環であったのがよくわかる。

もう一つ、『ハノイの花嫁』では、韓国の農村におけるベトナム人女性との国際結婚という社会問題が描かれている。農村のお兄さんがお見合いで連れてきたのがなんと弟がベトナムで付き合っていた彼女。韓流ドラマらしい設定だが、実はその現状は凄まじい。韓国社会の根強い男児選好思想による男女性別、女性らの未婚選好、農村忌避などが、農村男性に国際結婚を勧めている要因だ。国際結婚が増加する一方、社会的な対応の準備不足で、結婚詐欺事件、家庭内暴力、子どもたちへの先入観と二重国籍など様々な社会問題が放置されている。2話完結なので、徹夜しなくても韓流を楽しめる作品だ。

# しらたか 更り

しらたかの会のメンバーが交代で便りを書いてくれます。

01

01

疋田美津子 / ひきた・みつこ  
APLA共同代表



白鷹町の西側に南北に連なる朝日連邦。白く雪に覆われているのはすべて田んぼ。

「いい菜漬け」のバック作業に追わされている。「三五八漬け」とは福島県の会津地方から山形の置賜地方一円に昔から伝わる漬物で、塩、麴、炊いた米を三対五対八の割合で混ぜて寝かせた漬物の素を使った浅漬けである。旬の野菜にその15%ほどの素を混ぜて数時間置けば麴の甘味が生きた美味しい浅漬けのできあがり。先人の知恵と技に脱帽である。「いい菜漬け」はノラの会のヒット製品で、下漬けた白菜にすりおろしリンゴを加えたもの。下漬けた塩加減と漬け込みの温度と時間と重石の重さがうまさの決め手となる。下漬けた樽の蓋を開けた時の仄かに発酵した香りであまく漬かったかどうかかわかる(ように私もなった)。

ノラのは手持ちの資本が少ない分、作業場も設備も手作りで作ってきた。農作業も加工作業も自前の腕をひたすら磨くしかない。APLAの海外パートナーであるフィリピン・ネグロス島のチータや東チモール・ダニエルがここを訪れたときも、そのアジアン・サイズかつアジアン・スタイルなところが大きい参考になったらしい。雪に埋もれるこれからの数ヶ月は、手作りの技を磨く貴重な時間だ。

雪の朝 白菜漬けの 香り立ち

お問合せ先 02338-855675(べり屋内)

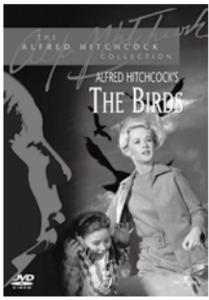
## 農作業・加工作業も自前の腕で

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい?

04

# 『鳥』

(1963年、アメリカ合衆国)  
【監督】アルフレッド・ヒッチコック 【出演】ロッド・テイラー、ティッピー・ヘドレン



『鳥』  
発売元:ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン  
価格:1,500円(税込)

これは「怖い」映画である。「怖がらせる」映画はあまたあるが、本当の意味で「怖い」映画は多くない。舞台は米国、サンフランシスコ近郊の海沿いの小さな町。この町である日突然、無数の鳥が群れをなして人間を襲い始める。カモメ、スズメ、カラスなど人間にとって身近で馴染みの深い鳥たちが、である。

原因も理由も不明。前兆もきっかけも見当たらない。そして、有効な対応策、対抗策も全く無い。

屋内へ避難しても煙突から、窓ガラスをたたき割り、戸や屋根を突き破り数百、数千羽の大群が侵入し、襲撃から逃れることはできない。逃げ場さえ失い、生命の危機にさらされた人間たちは、底知れぬ不安と恐怖のなかパニックに陥る……。

このようなストーリー、シチュエーションはもちろん映画ならではの荒唐無稽である。しかし、現実の世

## そして、さらに続く恐怖……

界でも同じような脅威、恐怖は存在する。そして、それは常に人間社会を脅かしている。

未知の病原体の出現、治療困難な疫病の発生、蔓延。地震や台風など自然の猛威。干ばつなどの異常気象。その後の渇水、食糧危機……。

人災の場合だってあろう。大気汚染や海洋汚染などによる公害、原子力関連施設の事故が引き起こす放射能汚染の襲来、経済恐慌によって生み出される貧困、戦乱……。

迫りくる危機、直面する脅威の前に、一人ひとりの人間が出来ることはあまりに少なく、その存在はあまりにはかない。

さらにこの映画にはもう一つの恐怖が描かれている。

突然の異常事態に怯える町の住民が主人公の女性に向けた狂気に満ち満ちた視線、そして放たれた言葉。「あなたが来てから……」。

曖昧な情報、無責任な憶測、流言飛語に惑わされ、集団心理に冒された人間の群れが為す所業は、次なる恐怖を生み出す。

はるか上空を羽ばたく鳥たちが地上の人間たちの阿鼻叫喚を見下ろす(文字通り)鳥瞰するシーンがある。あたかも人間の弱さ、愚かさを鳥たちがあざ笑っているかのようだ。

02

# むらを歩く ⑦

大野和興 / おおの・かずお  
農業ジャーナリスト、本誌編集長

北タイの中心都市チェンマイに農家とNGOが管理する有機農産物市場がある。週2回、水曜と土曜に開かれ、市場には朝暗いうちから、近郊の村から農産物を持って農家が集まってくる。車で3時間くらいかけてやってくる農家もいる。売るのは農家自身だ。屋台風の木造の小屋に陣取り、自分で生産したものを並べる。市場を運営しているのは、持続的な農業と地域づくりを手がけている地元NGO、ISACである。

1993年に設立された組織で、北タイ・チェンマイ県の各地で有機農業を軸とする地域づくりに取り組んでいる。

ここで店を出せるのは、ISACを母体に有機農業や持続型農業に取り組みする農家が集まって作った「北タイ有機基準機構」が認定した農家に限られる。ISACの担当者によると、認定基準は北タイの自然条件に合わせて作られている。

基準はなかなかきびしい。遺伝子組み換え品種や農薬、化学肥料は使っちゃいけない。水や風を媒介して周りに農薬が入ってこないような措置を講ずる必要がある。水は、地下水はよいが、外から引き入れる場合は、一時貯水するための沈殿池を作らなければならない。風対策として

## にぎわうチェンマイの有機農産物市場



チェンマイ有機市場

では、畑の周りに高い木を植える。毎週果実や野菜を出しているチェンマイ県下のオレンジ農家を訪ねた。気候条件のためか、この地帯のオレンジ栽培は、ほぼ週に一度の割合で農薬を散布する。散布した農薬は地下にしみこんで井戸水を汚染し、川に流れこんで周辺の環境に影響を与えた。オレンジ農家にも健康被害が続出した。ISACの技術者の指導も受けながら、何人かのオレンジ農家が無農薬栽培に転換した。そのグループのリーダーで45歳になるブラチオンさんに話を聞くことができた。「農薬散布をやめたオレンジ園は病気にやられ、樹が枯れてしまった。いま野菜に転換中。その販売先として有機農産物市場が大きな支えになっている」ということだった。

ISAC: Institute for Sustainable Agriculture Community

今回のお題

マスコバド糖 かりんとう  
マスコバド糖との出会い、  
そしてかりん糖。

レポーター  
守下武彦 / もりした・たけひこ  
株式会社旭製菓 三代目社長



**私**、守下は親が小さなかりん糖工場を経営していて、25歳の時、結婚を期に現旭製菓に専務取締役という肩書きで入社しました。それまでは、都内の麻布でサラリーマンをやりながら色々な勉強をし、現在となつてはその経験がかなり役に立っていることも事実です。

分て営業をして注文を取ってきては、それを工場で作って自分でトラックで納品...という様な感じでした。しかし、それでは会社は大きくならないし、もっともつとよい商品を世の中に送り出したいと考えて色々な商品を開発している時に『マスコバド糖』という、まだまだ日本で知られていない黒砂糖があるという事を知り、ATJさんにフィリピンのネグロス島まで案内してもらったのがマスコバド糖との出会いです。

その前に沖縄の各島々に渡って色々見たり聞いたり、台湾・タイ・中国・ミャンマー・ベトナム...と色々見て聞いてきていますが、やはりその中でもネグロス島のマスコバド糖が私が一番好きです。砂糖キビに無理をかけないで砂糖にしていることや、現地の人たちの心と思いが込められているし、ATJの考え方が気が入ったからかもしれません。その原材料のマスコバド糖を使って造った黒かりんとうは、安心であるし、安全であるし、何より「うまいんですよね。」「値段は高いけど!!」だから私は日本でただ一人、マスコバド糖を使ってかりん糖を造り続けている人間だと思います。頑なに、意地をはって造り続けています。嘗

業にも力を入れて売っています。

**たかがかりん糖、されどかりん糖!**

日本人が大好きなお菓子のひとつにかりん糖が入っていると思います。それは昔から「黒砂糖は体に良い!!」こと、ミネラルが沢山含まれているということが知られているからでしょうね。また、昔、甘いものが少なかった頃、上白糖は高価であったが、黒砂糖は安く手に入った、ということもあったからかもしれませんね。

かりん糖というお菓子を日本人がいつ頃から食べているのかは定かではありませんが、そのルーツは二通りあると言われています。その一つは、「昔中国人が日本に持ち込んだ



旭製菓さんの本社工場敷地内にある売店では、出来立てのかりん糖が直接販売されています。

マーハールというかりん糖によく似たお菓子」と言う人と、「オランダ人が長崎に持ち込んだ小麦粉を練って食油で揚げたお菓子を黒砂糖をまぶして食べてみたら美味しく、そこから変形したものである」という説があります。果たしてどちらの説が正しいのかハッキリ分かっておりません。

かりん糖とは昔から庶民的なお菓子であるという事が現在まで続いているものであり、日本人なら誰でも知っているお菓子ですよ。

私はいつも言い続けています。  
「たかがかりん糖、されどかりん糖!」

こんなにうまいお菓子は他にありませんか? かりん糖を食べるとね、日本茶が実に合うんだよ。

「美味しいお茶にかりん糖」うれしい時にかりん糖、「さみしい時にかりん糖」、「かなしい時にかりん糖」。

神様、仏様、かりん糖様!  
私は一生かりん糖バカでいいんです。こんな奴が、こんなガンコ者が日本の中に一人くらいいたっていいじゃないですか。ねー、皆さん...。マスコバド糖の黒かりん糖を宜しくお願い致します。■

《『旭製菓』さんのHP》 <http://www.asahi-seika.co.jp/>  
※色々な種類のかりん糖が揃っています。  
直営店：本社直売店（東京都西東京市泉町6-10-22 tel.042-421-4156）・田無店・鷺宮店・ひばりヶ丘店・花園店の5店舗



- 1 — パナウエの棚田を見守る、お米の神様。表情がやさしい。
- 2 — 刈り取られた稲穂を庭先に干しています。
- 3 — 世界自然遺産、パナウエの棚田。はるか下から見上げるほど上まで小さな田んぼが、どこまでも続く山肌。2000年以上続いてきた風景。全て人手で作られてきたと思うと感慨深い。
- 4 — パナウエの棚田を朝早く見学した後、市場近くのレストランで食べた朝食も美味しかった。海外へ出たときに楽しみの一つが食事。何でも食べてみることにしているのだが、どこでも好物ができる。このミルクフィッシュの干物のソテーも塩辛い味付けで赤米の入ったガーリックライスによくあって美味しい。

(2009年7月、8月撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(Tel:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!

編集後記

街並みの画一化は世界中に飛び火し、当然、安売り競争も世界中を巻き込み、資本は安い原材料、加工賃を求め、生産者から買ったたき、労働者の賃金を削り取る。こうして購買力がなくなった農漁民や労働者は安いものを求めてショッピングモールにつめかけ、地域の商店街はつぶれる。貧乏人が増えるから、モールが栄える。だけど皆がここでも買えなくなったら、その次はどうなるのだろう。今回の特集はそんな問題提起でもあります。(大野)

今号からコラムが3つ変わりました。ひとつは、ハリーナのデザイナーである重政さんが書く映画の話。『しらかば便り』はAPLA/あぶらの共同代表・疋田さんのグループの仲間が、そして『まだまだ韓流』はKAJA(Korea and Japan Alternative Learning)のメンバーの皆さんが、それぞれ交代でリレー執筆してくれます。継続コラムの『むらを歩く』は海外からのエピソードもお届けします。どうぞお楽しみに。(吉澤)

実家の近所に大きなショッピングモールが2つあります。互いの距離は1km程しか離れておらず、一昨年オープンしたばかりの大手グループ会社のモールは店舗も施設もより豊富。てっきり完全にこちらに軍配が上がるかと思っていたのですが、年末に訪れた時の昔からあるモールの食品売りの盛況なこと言ったら！ モールも消費者も生き残りに必死な安売り競争をまさに目の当たりにしてきました。(松田)

ハリーナ HALINA

2010年冬号 vol.02-no.07  
2010年2月1日発行

編集長  
大野和興

編集者  
吉澤真満子、松田麻衣子

表紙写真  
長倉徳生

デザイン・制作  
十年舎

編集・発行  
特定非営利活動法人APLA  
(APLA/あぶら: Alternative Peoples Linkage in Asia)

〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

印刷  
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。  
http://www.apla.jp/05/05\_halina.html

事務局の動き(2009年11月～2010年1月)	
11月 2日～30日	グリーンコープ共同体“fromネグロスセミナー”が行われ、大橋と吉澤が各地を訪問しました。(日付順にグリーンコープ生協(島根)、グリーンコープ生協ひょうご、グリーンコープ生協ひろしま、グリーンコープ生協おおさか、グリーンコープ生協ふくおか、グリーンコープ生協おおい、グリーンコープかごしま生協、グリーンコープ生協くまもと、グリーンコープ生協さが、グリーンコープ生協みやざき、グリーンコープ生協おokayama、グリーンコープ生協とっとり)
11月 9日	パルシステム・ドゥコープ平和団体交流会に吉澤が参加しました。
11月 16日	フィリピン・北部ルソン台風支援の呼びかけを開始しました。
11月 20日	第19回BMW技術全国交流会に秋山が参加しました。
12月 1日	大正大学で吉澤がAPLA/あぶらの活動について講義を行いました。
12月 3日	武蔵村山第一中学校生徒5名が事務所を訪問し、吉澤が授業を行いました。
12月 5日	2010年2月に行われる恵泉女学園大学スタディツアー(ネグロス島)の事前学習会を吉澤が行いました。
12月 18日～22日	株式会社社匠集団そらに、ネグロス島(カネシゲファーム)でのBM技術導入に関して現地調査をお願いしました。
1月 17日～27日	今後の活動に関して調査を行うため、吉澤と野川で東ティモールに出張しました。

事務局からお知らせ

3月19日～24日『新たなネグロスと出会うツアー』を企画しました。

APLA/あぶら会員の皆様、一般の方でも参加できるツアーを企画しました。ぜひご参加ください。

月日	日程
3月19日(金)	成田→マニラ→バコロド
3月20日(土)	民衆交易のこれまでを知る オルター・トレード社訪問、バナナ産地訪問
3月21日(日)	JCNC ～ APLA を通じて支援してきた地域を訪問 エスベランサ地域、サンフリアン地域(予定)
3月22日(月)	カネシゲファーム開所式と収穫祭に参加
3月23日(火)	ネグロス観光
3月24日(水)	バコロド→マニラ→成田

詳細は: http://www.apla.jp/images00/20091221.pdf  
※第1次締切:2010年1月31日、第2次締切:2010年2月15日

2月14日 バレンタインイベント・北のハチドリとコラボレーション企画 SPICY VALENTINE 2010 あぶら/APLA×SlowWatercafe

バナナの追熟やカカオ豆からチョコレートづくりワークショップなど、大人も子どもも楽しめるイベントを企画中です。 balanゴンバナナとエクアドルから届いたチョコレートを使った特製スイーツもご用意してお待ちしています。(お問い合わせ・申し込みはAPLA事務局まで。)

APLAでは会員さんへメールマガジンを配信しています。

APLA会員限定のメールマガジンを不定期に流しています。まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡下さい。info@apla.jp)

災害支援募金へのご支援ありがとうございました。

2009年は3つの緊急救援を行いました。以下が各支援先の募金報告となります。

フィリピン・台風被害マニラ周辺地区	267,162円
インドネシア・スマトラ沖地震	331,459円
フィリピン・台風被害北部ルソン	985,003円

マニラ周辺地区、スマトラ沖地震への緊急支援は、世界組織で緊急救援を行っているACTを通じて送られます。北部ルソンへの緊急支援はAPLAのパートナーであるCORDEVを通じて送られます。皆様の温かいご支援どうもありがとうございました。

『互恵のためのアジア民衆基金』設立総会に参加しました。

2009年10月9日、韓国ソウルにて、『互恵のためのアジア民衆基金(APEF)』の設立総会が開催され、一般社団法人として正式に発足することになりました。『ハリーナvol.2・3号』において、前年福岡で行われた基金設立準備のための『アジア民衆福開奇合』が行われたことを報告しました。設立総会には、韓国から約150名、日本から約60名が集まり、さらにフィリピン、インドネシア、東ティモール、パキスタン、パレスチナといったアジア各国からのパートナーたち総勢14名も



設立総会の様子

参加しました。APLA/あぶらも参加団体のひとつです。(株)オルター・トレード・ジャパン(ALT)が取り扱っているバランゴンバナナとエコシユリンPの基金参加団体における売り

上げの一部を積み立て、それを上記アジア各国のパートナーたちが行う事業に融資します。この融資は、世界的に広まる経済危機により、さらに弱く、貧しい人びとにしわ寄せがいく中で、南の民衆と北の市民が連帯して協力し合っていくことを形にしたものです。20年に及ぶ民衆交易の経験を発展させ、相互交流・多面的な連帯やネットワークに広げいきます。設立趣意書に「分断された世界を友情で結び、人間を真に解放していく第一歩」と記されていますが、人間としての誇りと尊厳を持って生きられるよう、南の民衆と北の市民の新たな連帯が始まりました。

道中、ツアー参加者たちはそれぞれの国や歴史、文化、自らが行っている活動などについて語り合い、共感したり、違いを発見して学びあいました。ドゥレ生協の店舗や物流センターに行き、それぞれの民衆交易品があると、メンバーどうしが「あったよ！」と声をかけあったり、喜んだりする姿もありました。全員が別れる前夜には、ケーキを囲みながらお別れパーティーをしました。しかし誰かが歌い始め、パレスチナの参加者がイスラエルとの闘いのときに仲間を思い自らを奮い立たせたという歌を歌い始めると、他の参加者も抑圧されていた時代に歌っていた歌を歌い始めました。その光景を見ると、私たちが共に連帯を深めようとしているアジアのパートナーたちは、今、この時代の中でも、自分たちの国、人びとの尊厳を守るために闘っていることが伝わってきました。今回のような出会いが、外からの抑圧に負けないように、お互いが支えあって生き



有機苗育苗施設でドゥレ生産者会の生産者から話を聞く。

韓国農村ツアー報告

設立総会に続いて10月11～16日まで行われました。

APFに参加しているフィリピン、インドネシア、東ティモール、パキスタン、パレスチナからの参加者、日本からの参加者数名を合わせた総勢18名で、ガイド役を務めてくださったドゥレ生産者会の案内で、韓国の生産現場、ドゥレ生協の店舗などを訪れま

した。今回訪れた生産現場は、循環型農業をドゥレ生協との取り組みで進めた地域や、りんご、なし農園などです。ドゥレ生産者会としての取り組みに加えて、90年代後半に韓国政府が打ち立てた親環境農業政策の影響もあり、生産現場では有機農業や農業を削減した栽培などの試みが始められていました。各

国の参加者からは、その栽培方法や、ラベル付けの仕組みなどにたくさん質問ができました。その他、農産物の加工場にも訪れ、加工方法に興味がある人もいれば、韓国の多くの工場がそうであったように、発砲スチロールが間に挟まっている板を組み合わせて建物を立てる簡易設計に興味をもったりと、それぞれの視点で視察を進めていました。

吉澤真満子

〔注1〕ドゥレ生協は韓国の生協連会のひとつで、韓国からのAPF参加団体のひとつ。ドゥレ生産者会は、ドゥレ生協の活動の発展の中で生まれた生産者組織。  
〔注2〕ドゥレ生協でも、マスコバド糖(ラリビニ、オリブオイル(パレスチナ)、コーヒー(ペリメール)他などを取り扱っている。